当時を知る人たちの思い

突如、茶畑の中に作られた海軍の基地。建設計画により、農地を取り上げられ、自宅を移転せざるを得なかった人や、隊で働くことになった人々。当時、基地周辺に住んでいた人々の生活は大井航空隊とともにあったと言っても過言ではありません。当時を知る方々に大井航空隊や当時の生活などについてお話を聞き、私たちは事実や思いを次の世代につないでいかなければなりません。

白松政巳（しらまつまさみ）さん（82）・布引原

早く勉強がしたかった

終戦のとき、私は14歳。海軍の飛行場ができると聞いたのは小学生のころで、当時児童だった私たちも牧之原小の移転作業を手伝い、旧校舎の机や椅子を運びました。

一番大変だったのは、奉安殿（ほうあんでん）の移転です。奉安殿は、天皇陛下の写真や勅語を納めていた、高さ約3m、幅約2mのコンクリート製の建物で、登下校の時などは奉安殿に向けて、最敬礼をしていました。家の曳家（ひきや）のように、丸太を道路に置いて、移転先の土地までみんなで運んだのです。とても大変でした。

あと、新しい学用地の整地も行いました。くわなどを使って土をならし、トロッコで土を運びました。早く勉強したかったので、その一心で早く学校を移転させたかったですね。

7つボタンに憧れて

私は、予科練習生（予科練）が着る7つボタンの制服に憧れて予科練を志願し、昭和20年10月から予科練になる予定でした。週に1回、予科練が外出するとき、大井航空隊の正門道路に整列して出てくる姿はとても格好良かった。戦争が終わり、予科練になることはできませんでしたが、今考えると戦争は恐ろしく、やってはならないものです。

もっと平和を大切に

昭和20年7月28日の朝の「バリバリバリバリ」というグラマンの機銃掃射が今でも耳に残り、防空壕に逃げる間もなく道に伏せた、その恐怖は鮮明に覚えています。

今は豊かで平和です。災害時もそうですが、これを当たり前と思わないで、もっと平和を大切にしてください。

旧牧之原小跡地の記念碑（中原）

基地建設のため立ち退き

「母ちゃん、家がなくなる」。9歳の妹は、不安そうに母親に言いました。私が11歳のときの昭和15年、基地建設のため、家の立ち退きを迫られたころでした。当時9歳と6歳の妹は肺炎を患っており、農業をしていた両親が大変な生活をしていたころ、急に立ち退きの話が出て、一方的な命令で仕方なく受けざるをえませんでした。一度移転しましたが日当たりが悪く、再度家を移転させました。本当に大変でしたよ。

道下（みちした）フミ さん（84）・布引原

無我夢中の戦争時代

開隊から2年が経過した昭和19年、隊の大井補給工場に勤めました。工場では、エンジンの点火線磨きをする毎日。15歳だった私たちは、学ぶことも遊ぶこともできず、国のために働きました。

終戦後、結婚して3人の子宝にも恵まれましたが、なんとかお茶の栽培を軌道に乗せたく、畑の開拓や子育てに一生懸命で無我夢中でした。

経験を次の世代に

平成10年に、戦争で行けなかった小学校の修学旅行に同級生24人と行ったことが、印象に残っています。童心に帰り、楽しみましたね。

今までは、あまり戦争の話はしてきませんでしたが、これを機になるべく早く、子や孫に自分の経験を伝えていきたいと思います。あんなに恐ろしい思いをした戦争はあってはならないのです。

58年ぶりの修学旅行（前列右から5番目が道下さん）

散っていった多くの仲間のおかげで私は今ここにいる

太平洋戦争終盤、旧日本軍は劣勢に立たされていた。そんな昭和20年2月に、飛行機の操縦教員として大井航空隊に転隊してきた吉田さん。大井航空隊で特攻隊員として訓練した日々や当時の思いについて、語ってくれた。

吉田秀雄（よしだひでお）さん（90）・島田市金谷

突然特攻隊員に

昭和20年2月、大井航空隊への転隊命令により、当時戦っていた上海から牧之原の地にやって来ました。21歳の時でした。

私は飛行機の操縦教員として着任しましたが、戦況が悪くなっていたため、間もなく、本来の飛行訓練は中止となりました。

大井航空隊は、練習航空隊から実戦部隊に改編。隊の飛行機は機種を問わず、全て特攻機となりました。偵察員の練習機として使われていた「白菊」も爆弾を搭載できるように改造されたのです。そして、神風特別攻撃隊「八洲隊」が組織されました。

一人の人間の命と引き換えに飛行機ごと敵戦艦の胴体目掛けて突っ込む特攻は、米軍にとって大変脅威であったことでしょう。

特攻も最初は、昼間に行われていましたが、機体の特性もあり攻撃を行うにつれ成功しなくなったため、夕方や夜間に実行するようになりました。訓練に備えるため昼間に寝て、トイレに行くときも暗闇に慣れるために黒い眼鏡を掛けて行ったことを覚えています。真っ暗闇の夜間に行われる訓練では、実戦さながらに低空飛行での体当たり攻撃などの練習を繰り返しました。訓練中に海に沈んだり、山の中腹に激突する機体も少なくありませんでした。

神風特攻隊「八洲隊」第一中隊（中列左端が吉田さん）

敗戦を受けて

8月15日、鹿屋海軍航空隊（鹿児島県）でいよいよ、沖縄への出撃準備を進め、飛行機のエンジンを掛けようとしていたとき、ラジオから流れる天皇陛下の玉音放送を聞きました。陛下からの激励の言葉かと思いましたが、日本の敗戦を知らせるものでした。現実を受け入れられない人がほとんどでしたが、私は心の中で正直、「これ以上、戦争を続けてはいけない。やっと終わった」と思いました。

しばらくして故郷に戻り、父に会って、「助かった」と話すと、父は「口に出してはならない」と言いました。生還した私を見て、父も本当はうれしかったと思いますが、他の戦死者のことを思い、私を戒めたのでしょう。

当たり前の日常が幸せ

特攻隊員は出撃すれば命を落とすので、常に死の覚悟を決めていました。戦時中ですから、「国のために死ぬことは名誉」という教育を受けていたのですが、本音は死にたくありませんでした。

今、私がここにいて話ができるのも、今の日本があるのも、国のために戦い、散っていった多くの仲間のおかげ。毎日、家族そろって食事をして生活する、当たり前の日常がいかに幸せかを心から感じています。

当時書いた辞世の句